

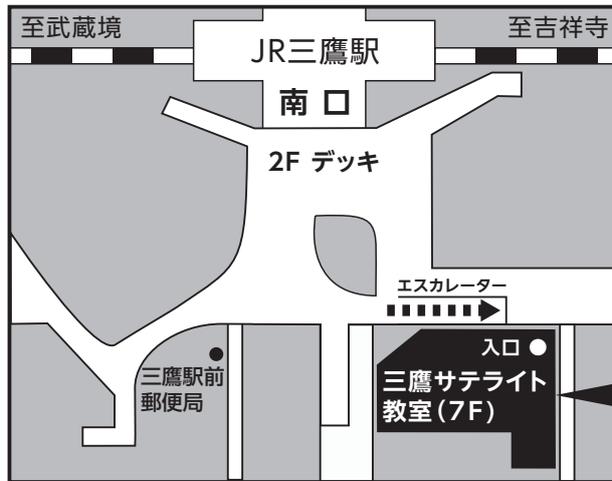
『源氏物語』

宇治十帖 総角(あげまき)巻を読む 続

受講料 (振込額)	10,000円				
必携テキスト	新潮日本古典集成『源氏物語 七』[新潮社 / 石田穰二・清水好子 / 1982年 / 3,960円]				
講座概要	曜日	月曜日		日程	
	時間	15:00~16:30			
	回数	全4回	定員		40名
	開講場所	三鷹サテライト教室 7F / 大教室			
講師	東京大学名誉教授・紫式部学会会長・博士(文学) 藤原 克己(ふじわら かつみ)				
	東京大学大学院博士課程中退。岡山大学教養部講師、神戸大学文学部助教授、東京大学文学部教授、武蔵野大学文学部特任教授を歴任。博士(文学)。著書に『菅原道真と平安朝漢文学』(東京大学出版会)、『菅原道真 詩人の運命』(ウェッジ選書)、共著に『改訂新版 日本の古典—古代篇』(放送大学教育振興会)、『源氏物語 におう・よそおう・いのる』(ウェッジ選書)、『2008年パリ・シンポジウム 源氏物語の透明さと不透明さ』(青簡舎)、論文に「源氏物語とクレージュの奥方」(柴田元幸編『文字の都市』東京大学出版会)などがある。				
内容	大君は薫に看取られながら息を引き取りますが、最後まで彼女は顔を袖で覆い隠していました。彼女は薫に対する愛を自覚した時から、自分の容色の衰えを強く意識するようになったのですが、作者は大君に「色衰えて愛弛む」(女の容色が衰えると男の愛もさめる)という中国の諺を固定観念として担わせているものと思われます。この固定観念のゆえに彼女は、男女の愛の永続性に対する深い不信感を抱いているのですが、その不信の深さはしかし愛の永続性に対する希求の深さと表裏一体のものだったでありましょう。なお、「色衰而愛弛」という諺は、中国文学においては〈婦人苦〉という『詩経』以来の伝統的な詩の主題に関わるものでした。また大君の死の直前には、亡き父宮が姫君たちへの恩愛の情の断ちがたさのゆえに往生できなかったことも明らかになります。				
	①4月15日：薫に看取られながら息を引き取る大君 ②5月13日：往生できなかった八の宮 — 恩愛不能断の物語 — ③5月27日：宇治の大君にみる〈婦人苦〉の主題 ④6月10日：愛の永続性に対する希求と絶望				



武蔵野大学 三鷹サテライト教室



〒181-0013
東京都三鷹市下連雀3丁目26-12
三鷹三菱ビル

JR中央線・総武線
東京メトロ東西線
JR 三鷹駅 南口より徒歩1分

三鷹三菱ビル 7F
(三菱UFJ銀行のビル)

1F入口からお入りください

- 「受講の手引き」を必ずお読みの上、ご参加ください。